

岩手県大槌町 医師会災害医療チーム（JMAT）に参加して

Vol.1



（第2次派遣隊）

活動期間：平成23年5月3～7日

支援場所：岩手県大槌町大槌高校救護所

参加メンバー：原田生知 薬剤師（株式会社町田アンド町田商会 サカエ薬局）
西村宜朗 薬剤師（株式会社町田アンド町田商会 サカエ薬局）
工藤源造 総務担当（株式会社町田アンド町田商会 福祉サービス課課長）

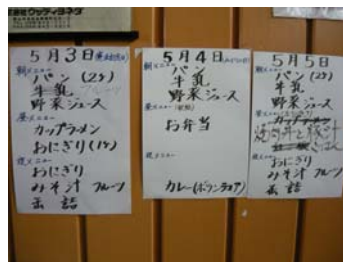
避難所の状況

今回支援に入った避難所の大槌高校体育館は立ち上げに AMDA(特定非営利法人アムダ)が関与したこともあり、避難所内は整然と区画され、区画ごとに高さ2mほどのカーテンで仕切られ、プライバシーが確保されている。

避難者数は被災直後の500名以上から245名にまで減少したとのことであるが、依然として体育館での不便な生活を強いられている状況である。

不便な状況が長期間続いてはいるが避難者の秩序は保たれている。なお、神奈川県警が常駐しており、安全性の確保も万全である。食事は避難所在住の調理師資格者をリーダーとして当番制で大槌高校調理室を利用して行われている。供給されている食事

内容も現在では質、量とも十分であると思われた。一方で被災後2ヶ月近く経過した現在もプライバシーのほとんどない環境で、食事内容も十分でない避難所も散見されるようである。大槌町内の避難所の中でも大槌高校避難所は環境が整備された避難所であるとの印象を受けた。



避難所の保健衛生

被災直後より保健師が中心となり手洗い、うがいが推奨されている。我々の支援期間中は愛知県の保健師チームが大槌高校で活動を行っていた。避難所内のあらゆる手洗い場所には消毒用石けんと速乾性手指消毒剤が配備され、簡単な手洗い方法を示したポスターが設置されている。その成果もあってか現在、避難所内でのインフルエンザ、胃



腸炎等の流行はみられない。インフルエンザ罹患者の発生もあったが医療チームが隔離を速やかに実施したため、感染性疾患の流行はなかったようである。しかし、各医療チームの撤収後の公衆衛生の維持、管理は重要な課題と思われる。

JMAT(日本医師会災害医療チーム)による救護所活動

JMAT 青森の一日は6時30分起床、朝食を分担して準備し7時にチーム全員で食事をとにした後、8時45分診療前カンファレンスを実施。カンファレンスは青森県、長野県合同で行う。出席者は医師、薬剤師、看護師、保健師、事務担当(今回は弊社 工藤課長のみ)で、医療チームリーダーである青森県の医師を中心に送り事項の確認を行う。



9時00分より午前診療開始。薬剤師の担当業務はカルテを基に調剤、薬袋作成、医師への処方設計支援、代替薬提案、患者への薬剤交付、在庫管理などである。処方の基本方針として在庫してある医薬品はなるべく増やさないことであるため、医師がカルテに記載した医薬品がない場合は代替薬を提案することとなる。この基本方針をチーム内で



最初に確認しておいたことにより、代替薬提案はスムーズに行えた。また、必要最低限の薬効群に関しては在庫切れのないよう、随時在庫調査が必要である。必要な医薬品は毎日17時00分に釜石で開催されるカンファレンス(釜石地区災害対策本部会議)出席時に薬剤師会代表者に交渉すれば翌日配送される仕組みとなっている。

調剤業務は長野チームにも薬剤師1名同行しているため基本的には青森、長野各1名、計2名で十分と思われた。

診療は午前11時30分までで午後は1時00分から4時00分までである。

4時10分に釜石カンファレンスに出発。青森、長野チームのどちらか当直のないチームが出席するのがよいと思われるが、特段取り決めはなかったので、チーム交代時にリーダーによる調整、確認が必要である。

カンファレンスは5時00分釜石駅前のシープラザ釜石で行われ、出席者は各医療チーム代表3-4名、総数で50名程度であった。内容としては各医療班による診察者数報告、必要なサポート提案で、30分程度で終了する。救護所に必要な薬のオ

リーダーはカンファレンス終了後薬剤師会代表の中田氏に依頼する。

カンファレンスから戻ると6時くらいとなる。カンファレンス出席がない場合は当直サポートを担当した。診察時間終了後も随時患者受付をしており、医師が呼ばれた際は診察に同行して調剤を行う。そのため、当直医師とすぐ連絡が取れるように薬剤師の携帯電話の番号を伝えることとした。



救護所内の調剤業務について

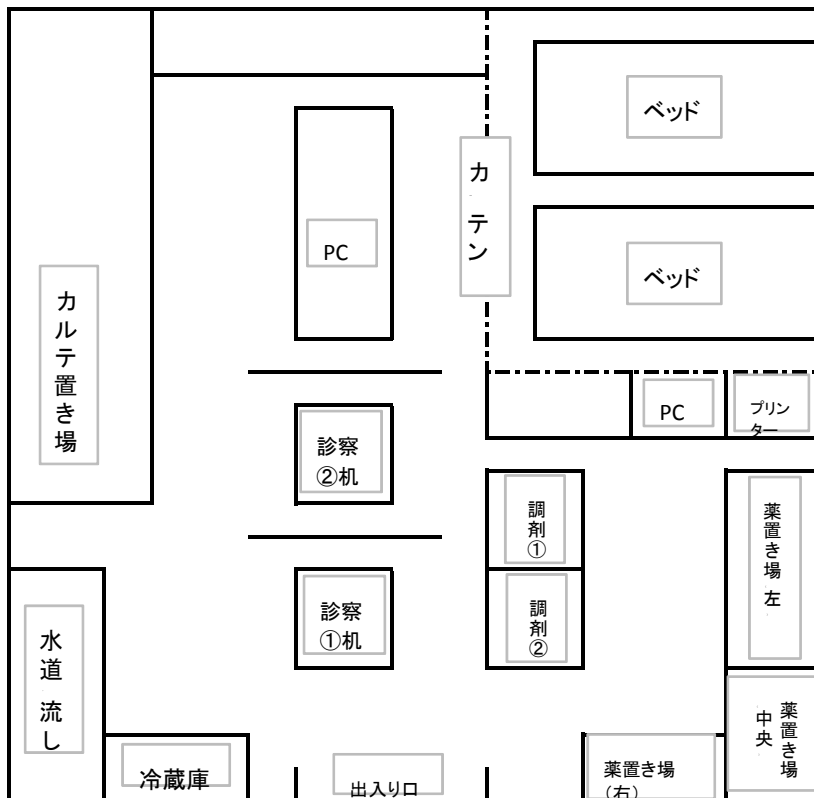
大槌高校救護所でのボランティア薬剤師の支援内容は、救護所内の薬品の管理と受診した患者様への服薬指導が中心であった。救護所には支援団として JMAT（青森県医師会）医師、看護師と株町田アンド町田商会薬剤師の青森チーム、長野県医師会チームが派遣されていた。

救護所は大槌高校の保健室を利用し、医師 2 名、薬剤師 2～3 名、看護師 2～3 名、その他総務担当の編成である。私たちが支援した 5 月 3 日～5 月 7 日は青森県医師会チームの医師が救護所のリーダーを務めていた。

救護所における診療は災害救助法に基づいておこなわれるため、患者様への負担金は発生しない。薬の在庫については、ほとんどが寄付によるものだが、必要に応じて発注も可能であった。その場合の料金は県が支払っているとのことであった。今回のような災害支援の場合、可能な限り代替調剤を提案するなどにより、寄付された医薬品で医療をまかなうことも薬剤師の仕事の一つと思われた。

救護所内について

救護所内では、診察 1、診察 2 とパーテーションで区切られ、それぞれに机が設置されている。その隣にはパソコン（オンライン）が設置され受診患者情報の記録が看護師によっておこなわれている。また、そのパソコンの後ろにはカーテン、ベッドが 2 台設置され、点滴等に対応できるようになっている。医師の診察機の後ろのスペースが薬局スペースで、2 つの机を並べて作業台とし、調剤業務を行った。薬局スペース横にはパソコン（オフライン）とプリンターも設置されデータの管理等に活用していた。救護所がおかれている保健室内の大まかな見取り図は下記の通りである。



薬の管理はすべて薬剤師が担当しており、薬剤師は在庫から適切な薬剤を選択し、医師に処方代替案提案をするケースも多かった。

調剤業務の流れは処方監査、調剤、調剤監査、服薬指導という順番である。薬剤師2名で分担して実施することが多かった。



JMAT チームの生活環境

入浴設備なし。水道による洗髪は可能である。生活に必要な物として歯ブラシ、洗顔剤、タオル(毎日乾かせば洗顔用1-2枚、着替え時用バスタオル1枚)、毎日の着替え、替えズボン1-2着、上着(季節により半袖)着替え2-3枚、寝袋またはシーツ



(枕用も含む)、ハンガーを2-3本準備すれば便利である。

季節による変動もあるが、今回派遣時は、室内温度は20度に保たれており快適に過ごせた。ほこりは生じておらず、校内でのマスク着用は不要であった。

食事は前回までいたチームが残していった缶詰等が沢山残っており、今後は総務担当同士が連絡を取り合い必要な物のみ補給する形式で良いと思われる。



食事について

昼食、夕食も朝食同様青森チーム内で分担し一緒にとる方式であった。ただし、チームにより食事準備による考え方に違いがあると思われるので最初に食事準備について打ち合わせが必要と思われる。食事準備、食事、後片付けは、医師チームとコミュニケーションをとるには最適な時間であった。初めて顔を合わせる同士、分担等について声かけをすることや、いろいろな場面で協力することが非常に大切だと思われる。食事の準備、味付けだけでなく、配膳準備、食器洗い、食後の後片付けと食事準備以外にも雑用があるので全員参加で気持ちよく過ごす気配りが大切と思われた。



大槌町の現状と見通し

5月6日現在で保険診療を再開したのは大槌地区3か所(県立大槌病院仮設診療所、藤井小児科内科、道又医院)。すべてマンツーマン立地で保険薬局も再開した。被災前は6か所の保険薬局があったとのことで診察、調剤機能ともに被災前の状態にほぼ復旧した。災害直後の救急医療は最終段階を迎えていると思われるが、一方で避難所生活を強いられている多くの方は交通手段を持たず、再開した診療所、医療機関に通院することも困難な状況であり、公共交通機関の整備が差し迫った重要な課題である。



JMAT チームでの薬剤師業務

今回は被災後1ヶ月を経過した時点であり、被災直後には1日200名だった患者数も1日20~30名に落ち着き、緊急性のあるケースも少なかった。患者は主に避難所に避難している住民であった。処方内容としては風邪等の急性疾患と血圧をはじめとした慢性疾患の患者が多くを占めた。特に慢性疾患患者の薬切れの対応が中心であった。救護所の方針としては薬切れの場合は必要最小限の日数を救護所で調剤、交付し、残りは救護所外処方せんを大槌病院仮設診療所内に併設された地元保険薬局へ発行する形式をとっていた。処方薬の同定はお薬手帳が有効であったが所持していない、または紛失してしまった方も多く、持参薬や聞き取りにより推定するケースも多い。基本的には業務の流れ上、看護師が問診しているが、今後は薬剤師が処方薬に関する問診に参加することで作業の効率化が図れると思われた。薬剤師業務としては調剤、服薬指導はもちろんのこと、救護所内で交付する処方せん内容について在庫がない場合の代替薬の提案の役割が大きかった。また、救護所とはいえ、医師の事務作業量はカルテ書き、処方せん記載等かなりのボリュームがあり、混雑時等は薬剤師から積極的に医師に声掛けを行い、カルテからの処方せん転記等事務作業補佐により医師がより多くの時間を診察にかけるよう協力することも薬剤師として大切な業務であると思われた。



また、医薬品の管理については在庫置き場の教室の施錠がされておらず、自由に行き来が出来る状況であったが、被災直後と比較し、薬品使用量も落ち着いていたため、医師へ提案し常時施錠するとともに向精神薬はすべて診療所内で保管することとした。医薬品在庫数は相当数に上るため今後は盗難、紛失防止も薬剤師の重要な役割であると思われた。

当直サポートも大切な業務である。今回派遣中はじんましん発症、腹痛と緊急性の高い事例はなかった。また、いずれも21時前の受診であった。しかし、医薬品数も限られる状況の中、薬の準備は看護師には負担があり、薬剤師が責任を持って行うべきであると思われる。

一方、今回残念ながら導入できなかったこととしてはカルテへの薬歴記載共有が挙げられる。救護所の仕事に慣れるまで2-3日を要してしまい、医師に提案しそびれてしまったことが悔やまれる。基本的に服薬指導は薬剤師がカルテをもとに実施

しているので次のチームには積極的に医師に服薬指導に伴う薬歴記載について説明し、カルテで患者情報を共有するよう行動をお願いしたい。

医薬分業の進展と医薬品数の増加により、医療チームにおける薬剤師が担うべき分野が確実に増えていることが実感された。医師からの期待も大きく、薬剤師側から積極的に業務分担を提案することで医師がより多くの時間を診察に回せるように支援する姿勢が必要である。

総務担当者の役割

同行した総務担当者の役割も重要であった。食事の準備のほか、特に釜石カンファレンス往復の運転、日々変化のある被災地の状況調査等に機動力を発揮した。今後、被災地の状況が回復するにつれ、必要に応じて現地での食料調達にも活躍の場が広がる可能性があると思われた。



おわりに

今回、町田社長以下多くの皆さまのご協力のおかげで JMAT 活動に参加する貴重な機会を与えて頂きました。心より御礼申し上げます。三陸沖で発生した未曾有の巨大地震により多くの方が被災し、被災後 2 カ月近く経過した現在でも困難な状況での生活を強いられています。そんな中、被災地では非常にたくさんのスタッフが地元の人と一緒に復興へ向け、力を合わせて活動をしていました。被災地での医療活動等を通じて医師、看護師、保健師等多くの専門職、支援業務従事者のご協力を得て、微力ながら薬剤師として、また、医療・食糧供給から社会貢献を果たすという株式会社町田アンド町田商会としての役割を果たすことが出来たのではないかと思います。また、JMAT の活動を通じて災害の医療現場での薬剤師へのニーズ、発揮すべき職能を再確認することが出来ました。多くの医師より、「薬剤師がいてくれて大変助かった」との言葉を頂き、非常な励みになるとともに、より一層薬剤師業務を高める必要性を感じました。

医師、看護師、薬剤師が同じ空間で患者治療に当たるという非常に貴重で有意義な経験をこれからの業務に役立てていきたいと思えます。被災地からの帰路、津波で甚大な被害を受けた大槌町、釜石市街地を抜け、釜石市郊外へ至ると、ごく普通の景色が広がり、そのまま弘前へ続いていました。被災地は遠くの出来事のように感じて支援に出発しましたが、現地で活動を行い、帰路に着くと被災地と非被災地は同じ陸続きであることを実感します。

いまだに多くの方々が震災の傷跡に苦しんでおります。被災した皆様には心よりお見舞い申し上げるとともに、今後も引き続き、様々な分野から出来る限りの支援を続けていく必要性を感じます。医療体制は復旧しつつありますが、交通インフラや農漁業の再生に向けて当社でもまだまだいろいろな角度から支援が出来るように思いました。



謝辞

今回お世話になった方々へ

引地医師とチーム引地の皆さま:

強力なリーダーシップとチームの皆さまの明るい雰囲気合流最初の緊張がみるみるほぐされ、スムーズに活動に入ることが出来ました。ありがとうございます。

沖津医師:

楽しいお話たくさん有難うございます。診察はもちろんのこと、おいしいビールの注ぎ方大変勉強になりました。

八木医師夫妻:

救急診療所業務をはじめ、連日忙しい中、GWの休みを返上しての救護活動参加お疲れ様でした。小児診療をはじめ、さまざまなアドバイスありがとうございました。朝の散歩でのお話もとても楽しかったです。

大城医師とチーム大城の皆さま:

おおらかな心で私たち町田チームを引っ張って頂きました。多くの貴重なお話をお伺いすることが出来、大変勉強になりました。ありがとうございます。

安藤薬剤師夫妻:

東京よりボランティアで薬局業務支援お疲れ様でした。薬局業務引き継ぎご指導ありがとうございました。

岸医師と長野チームの皆さま:

遠路長野からの支援お疲れ様でした。夜の意見交換会とても楽しかったです。小林薬剤師の気づかいにより薬局業務もお互い協力して中身の濃い支援が出来たと思います。

町田アンド町田商会社員一同:

町田社長をはじめ、皆様のご支援、ご協力のおかげで無事第2次災害支援チームの活動を終えることが出来ました。本当にありがとうございました。

今回の活動に多大なるお力添えをいただいた皆様に心より感謝するとともに、厚く御礼を申し上げます。

以上